

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 20 日現在

機関番号：24505

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24792581

研究課題名(和文) フィリピンにおけるヘルスワーカーの巡回型産褥期訪問システムの開発と評価

研究課題名(英文) Development of health check-up system for postpartum women who delivered at home in the Philippines

研究代表者

山下 正 (Yamashita, Tadashi)

神戸市看護大学・看護学部・助教

研究者番号：90613092

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：フィリピンは、東南アジアの中でも母体死亡率の改善が緩慢である。本研究では、フィリピンの母体死亡率改善に寄与すべく、保健サービスの利用、中でも産褥期の支援に焦点をあてて調査を行った。本調査では、女性は産褥期の体調変化や疾病に関する知識が少ない可能性があること、施設分娩者に比べて自宅分娩者は産褥期の保健サービスの利用が不十分であること、BHWは褥婦を家庭訪問し、問診から健康問題を把握している活動内容を記述的に明らかにした。また、自宅出産者にはHilotによるケアだけでなく、産前産後に保健センターで予防接種を受けるなど、Hilotと保健センターを使い分けている現状があることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The maternal mortality ratio in the Philippines remains high. We conducted the present study to examine the current state of postpartum health care service utilization in the Philippines, and identify challenges to accessing postpartum care. A questionnaire and knowledge test were distributed to postpartum women in the Philippines. The questionnaire collected demographical characteristics and information about their utilization of health care services during pregnancy and the postpartum period. Sixty-four questionnaires and knowledge tests were analyzed. Results: The mean time of first postpartum health care visit was 5.1±5.2 days after delivery. Postpartum utilization of health care services was significantly correlated with delivery location ($P < 0.01$). Women who delivered at home had a lower rate of postpartum health care service utilization than women who delivered at medical facilities. The majority of participants scored low on the knowledge test.

研究分野：地域看護学、国際保健学、公衆衛生看護学

キーワード：フィリピン 東南アジア 母子保健 自宅出産 母体死亡 ヘルスボランティア 保健システム

1. 研究開始当初の背景

フィリピンは東南アジアの中で最も母体死亡率の改善がみられない国である。2000年に国連ミレニアム・サミットで採択されたMDG, Target-5.A.(2015年までに妊産婦の死亡率を1990年の4分の1に削減)の達成が極めて難しい状況にある(WHO, 2014)。フィリピンは、年間出生数が2,245,000人、合計特殊出生率が3.1(2009年)、母体死亡率が120(対10万人)(2013年)と今後も出生数の増加が見込まれるが、母体死亡への対策が世界的にも緊急の課題である(WHO, UNICEF, 2014)。フィリピンの母体死亡の主な原因をみていくと、分娩から産褥期に起こる合併症が41.0%、妊娠高血圧症が32.1%、産褥期出血が17.9%、中絶が9.0%、敗血症が8.0%である(Ronsmans C et al, 2006)。これらの特徴として、産褥期の死亡が多いこと、出血や感染症などの予防可能な原因が多いことが考えられる。そこで、当申請者はフィリピンの褥婦の産後の保健サービスの利用状況について調査を行った。その結果、施設分娩者に比べて自宅分娩者は産後の保健サービスの利用が不十分であることであることを明らかにした(PloS ONE, Yamashita et al, 2014)。このことは、自宅分娩者への支援の重要性を示した。

自宅分娩率が33%のインドネシアでは、女性が自宅分娩を選ぶ理由として、医療機関への物理的距離、経済力、女性の社会的地位であると報告された(Titaley CR et al, 2010)。一方、フィリピンの自宅分娩率は55.5%と高く、また専門職が付き添わない分娩の割合についても38.0%(2005-2009年)と東南アジアの中でもその割合は極めて高い。フィリピンでは自宅分娩の介助者の多くは伝統的産婆(ヒロット)が現在も多く、分娩介助に関する免許をもたないヒロットによる出血死、(非)合法的な中絶手

術、不十分な産後管理指導などから母親の健康障害につながっている例も多い(Sibley L et al, 2004)。ヒロットと住民の関係は、伝統的文化・習慣と深く関連している。そのため、自宅分娩者の産褥期の重篤な健康悪化につながる要因を検討する上で、保健サービスだけではなく、生活・環境、伝統的文化・習慣などより生活に密接した多面的な検証を行う必要がある。フィリピンの保健システムを整備する上で、専門職のマンパワー不足という大きな問題点がある。フィリピンでは医師12.0(対1万人)、看護師42.5(99-02年)と東南アジアの中でも最も少なく、さらに専門職の国外への流出が非常に多い深刻な社会問題をもつ(Asia Pacific Observatory on Health Systems and Policies, 2011)。この課題に対して我々は同科研費を基に、 balan gay・ヘルス・ワーカー(以下、BHW)と呼ばれる保健センターに登録しているボランティアの存在に注目し、彼らの活動実態調査を行った。調査結果から、BHWは家庭訪問を通じて、自宅で生活する褥婦の心身の健康の問診を行ったり、予防の目的で健康に関する情報提供をしたり、必要に応じて受診勧奨しているなど地域で生活する褥婦に対して予防活動を行い、地域全体の健康の維持・増進に寄与していた。しかし、BHWは産後ケアにおける知識や技術を学ぶ機会が非常に少ないことや担当患者が非常に多いことなど彼らの活動を妨げる要因が複数存在することが明らかになった(Tropical Medicine and Health, Yamashita et al, 2015)。

2. 研究の目的

フィリピンの高い母体死亡率の背景には、産褥期の健康障害や、自宅による分娩及び産褥期の健康管理リスク、専門職のマンパワー不足など様々な社会的・文化的要因が

存在することがわかる。本研究では、その母体死亡率減少に寄与すべく、フィリピンのムンティルパ市と共同研究体制の基、自宅分娩の妊娠期から産褥期の生活状況や保健・医療サービスの利用状況などの実態と自宅分娩者の健康に及ぼす影響の検証、BHW の能力向上と BHW を既存の保健システム内で十分に活用できるモデルの有用性の検証を行う。

3 . 研究の方法

調査 1 (調査期間 : 2013 年 1 月)

対象者を褥婦とし、フィリピン大学附属病院から 22 名、ムンティルパ市から 42 名、計 64 名の分析を行った。質問紙の内容として属性、妊娠中と産後の保健サービスの利用状況、母子手帳、知識テスト、エジンバラ産後うつ自己評価表 (EPDS) を使用した。また、BHW の産褥期支援の役割を明らかにするために、BHW とフォーカス・グループ・ディスカッションを行った。

調査 2 (調査期間 : 2014 年 3 月)

研究代表者は、 balan gay ヘルスワーカー (BHW) によるムンティルパ市在住の褥婦 3 名への家庭訪問に同行し、BHW の家庭訪問の現状を参与観察により分析を行った。

4 . 研究成果

本研究目的である産褥期保健サービスの現状については、2013 年 1 月に現地調査を実施し、褥婦の産褥期の健康に関する知識が不十分である可能性があること、施設分娩者に比べて自宅分娩者は産褥期の保健サービスの利用が不十分であることを明らかにした (PLoS ONE, Yamashita et al, 2014)。また、BHW の産褥期支援の活動として、褥婦を家庭訪問し、問診から健康問題を把握し、健康に関する情報の提供や、ビタミン剤などの投与、病院やクリニックへの搬送

の活動を行っている現状が明らかになった。一方で、産褥期に関する知識や技術が十分ではない、対象者が多くて十分な支援を行う時間がないなど BHW の活動を阻害する要因についても検討することができた (Tropical Medicine and Health, Yamashita et al, 2015)。このことから、BHW の活動はフィリピンの母子保健システムの中で非常に重要な役割を担っていること、自宅出産者が保健サービスの利用上リスクが高い現状が考えられた。2015 年 3 月の調査では、自宅出産者の約 7 割が Hilot (伝統的産婆) による出産介助に頼っているが、それらの者は Hilot によるケアだけでなく、産前産後に保健センターで予防接種を受けるなど、Hilot と保健センターを使い分けている現状があることが明らかになった。すなわち自宅出産は、子どもが多くて施設で出産できない、何でも気軽に相談できる Hilot に出産介助をしてもらいたいなどのネガティブでない理由で自宅出産を選んでいる現状がみえてきた。今後は、自宅出産をネガティブなものとして捉えるのではなく、自宅出産者が保健センターのサービスをより上手く活用できる仕組みを考えたい。その中心となる資源が BHW と考え、BHW への教育プログラムの作成・評価を現地研究者と共同で行い、引き続き調査を続けていく。

5 . 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 3 件)

1. Yamashita T, Sherri Ann Suplido, Cecilia Llave, Maria Teresa R. Tuliao, Yuko Tanaka, Hiroya Matsuo. Understanding postpartum healthcare services and exploring the challenges and motivations of maternal health service providers in the Philippines: a qualitative study. Vol.43 - No.2, 2015

123 - 130.

2. Yamashita T, Sherri Ann Suplido, Cecilia Ladines-Llave, Yuko Tanaka, Naomi Senba, Hiroya Matsuo. (2014) A Cross-Sectional Analytic Study of Postpartum Health Care Service Utilization in the Philippines. PLoS ONE 9(1): e85627. doi: 10.1371/journal.pone.0085627

3. 山下正, 松尾博哉, 保健師による外国人への母子保健サービス提供の現状と課題
愛知県の市町村に勤務する保健師へのアンケート調査の分析から, Journal of International Health, Vol.27 No.4, p373-380 (2012).

〔学会発表〕(計3件)

1. 山下正, Suplido, S, Llave, C, 田中祐子, 松尾博哉: フィリピンにおける褥婦の保健サービスの利用状況とその阻害要因, 第27回びわ湖国際医療フォーラム, 2013.7. 大津.

2. Yamashita T, Cecilia Llave, Yuko Tanaka, Naomi Senba, Hiroya Matsuo, The study of postpartum health care services by health professionals and Barangay Health Workers in Philippines, 第27回日本国際保健医療学会, 2012. 11. 岡山.

3. 山下正, 松尾博哉, 保健師による外国人への母子保健サービス提供の現状と課題, 第29回日本国際保健医療学会西日本地方会, 2011. 3. 佐賀.

6. 研究組織

(1)研究代表者

山下 正 (Yamashita Tadashi)

神戸市看護大学健康生活支援学領域

地域・在宅看護学分野 助教

研究者番号: 90613092